

法然の来迎観

中 臣 至

「来迎」とは、念仏行者の臨終（臨終終時）の時に阿弥陀仏が諸の聖衆と共に行者の前に来たり、迎え取るということであり、それは浄土に往生したいと願う人の臨終に阿弥陀仏が菩薩、聖衆を率いてその人を迎えに来るということでもある。その「来迎」は、浄土往生思想において、主要經典である「浄土三部經」のいずれにも説かれていることは、臨終時の来迎がいかに重要であることを示すものといえよう。それは、『無量寿經』には第十九願文および三輩往生段、『観無量寿經』には九品段、『阿弥陀經』には往因段で説かれており、機根の違いによって来迎の内容も異なっている。⁽¹⁾

その臨終時の来迎、つまり「臨終来迎」を特に重要視する平安浄土教では、第十八願より第十九願（臨終来迎を誓う）を中心の願とみるのである。それが、鎌倉浄土教においては、第十八願中心の浄土教義が説かれるようになると、臨終来迎を否定するようになるが、臨終来迎を説いても本願力の救いを中心として、その利益として臨終の来迎が語られるように

なる。今回は、そのような背景の中から法然の『無量寿經』の第十九願文における「臨終来迎」観をみてみる。

まず、法然文獻における「来迎」について一番詳細である『西方指南抄』巻上本所収「法然上人説法」〈来迎〉には、「いまこの造立せられたまへる仏は、…来迎引接の形像をつくりたてまつりて、すなわち来迎引接の誓願をおぐべきものなり。その来迎引接の願といふは、すなわちこの四十八願の中の第十九の願なり。人師これを釈するにおほくの義あり。まづ臨終正念のために、来迎したまへり。おもはく…次に道の先達のために来迎とたまふといへり。…次に対治摩事のために来迎すといふ義あり。…」とあり、同様な内容のものに、『漢語灯録』所収「逆修説法」一七日の頃、『浄土宗略抄』等とあり、こ内容が主流となり多くの文獻に見受けられる。⁽²⁾

これらには、来迎の目的として一つには臨終正念（臨終に際して心を正し、弥陀の来迎、浄土への往生を期すること）に住して三種の愛心（境界・自体・当生）をほろぼし、加持護念した

まう、二つには浄土への道略を示す先達として、三つには魔障を対治せんがための諸理由をあげるのである。それはあくまでも第十八願の念仏の必然の利益であるとみなされていた。しかもそれは当時一般に信じられていたような、臨終に正念に任じて称えた念仏によって来迎の益を得るのではなくて、平生の念仏に依つて往生の行が成就しているのが来迎に預かり、それによって正念も成就し、魔事も対治されるのである。平生に往生の行成就しているというのは、いわゆる平生業成であつて、平生に摂取不捨の利益に預かつていたその徳が臨終に顕現するのが臨終来迎であるから、あえて来迎を願い求める必要はないことになる。

平生の称名の自然の利益としての臨終来迎を重視し、来迎の利益として臨終正念を得て往生すると説く立場である。

しかし、法然の立場として、旧来の流れを完全に否定はできないこともみることが出来る。『西方指南抄』の「大胡の太郎実秀へつかはす御返事」において、「弥陀の本願うたがはずして、念仏申さむ人は、臨終わるきことはおほかた候まじきなり。そのゆへは、仏の来迎したまふ事は、もとより行者の臨終正念のために候なり。…ただの時に、よくよく申おきたる念仏によりて、臨終にかならず仏来迎したまふ^③」とあり、これは、平安浄土教からの流れを受けたものであり、第十八願の念仏往生の現益を示すものが第十九願であるとす

るものである。

『西方指南抄』以外においては、『三部経大意』（観経に、「しかれば…しかも臨終の時にはみづから菩薩聖衆と圍繞して、その人のきへに現ぜむと願をたてたまへり。第十九の願これなり。これによりて臨終のときにいたりぬれば、仏来迎したまふ、…」同様、に、『和語灯録』巻二「三部経釈」の「観経」について、「…臨終の時ほとけ身づから来迎し給ふに、…かならず臨終の時には身づから菩薩聖衆に圍繞せられて、その人のまゑに現ぜんとちかひ給へり、第十九の願これ也。これにて臨終の時いたれば、ほとけ来迎し給ふ。行者これを見たてまつりて、…」^④とあり、第十九願の意を中心に、仏の来迎の意義について細釈している。仏の来迎の相を行者が見ることによつて、心に歓喜を得、禅定に在るのかのように正念往生するのである。このことについては、正念に任することによつて来迎を得るのか、来迎を得ることによつて正念に任ずるのか、ということが、法然の頃からすでに問題にされていたようである。

しかしながら、『西方指南抄』「四箇条問答」には、「問、本願と本誓と、その差別いかんぞ。答、我成仏の時の名を称せむ衆生を生ぜしめむと云は本願也、もし生まれまじくば仏にならじと云は本願也。忽じて四十八願は法蔵菩薩のむかしの本願也。この願にこたへたまへる仏果円満の今は、第十九の

来迎の願にかぎりて化度衆生の御方便はあはしますべきなりと云なり。^⑤とあり、第十九願を諸行の往生を明らかにする願とみる見方もある。つまり、諸行の人々を引入し、念仏の願に帰せしめんとする主張である。また、『西方指南抄』「十八条法語」において、「又云、第十九の願は、諸行之人を引入して、念仏之願に帰せしめむと也。」^⑥というように、諸行の人を第十八願へ誘引する方便願とみられる第十九願観もあつたことは注意されるべきである。

また一方で法然には、第十九願力を他力とよばれることもあつた。『西方指南抄』所収「十一箇条問答」第十問答には、「問、自力・他力のことは、いかがころうべく候らむ。答らくは、源空は殿上へまいるべききりやうにてはなけれども、上の御ちからなり。まして阿弥陀仏の仏力にて、称名の願にこたえて来迎せさせたまはむ事おぼ、なむの不審あるべき。自身の罪おもく、…かるがゆへに他力の本願ともいひ、超世の悲願ともいふなり。云々」^⑦第十九願の来迎は、第十八願力の自然のとして与えられる益だったのである。また、『和語灯録』「示或女房法語」には「…智慧のひかりもくもりて、生死のやみをてらしがたければ、聖道の得道にももれたるわれらがために、ほどこし給他力と申候は、第十九のらいかうの願にて候へば、文に見へず候とも、かならずらいかうはあるべきにて候なり。」^⑧これは、法然が第十九願の来迎を、第

十八願の念仏往生の機のための臨終の益を誓つたものとみられていたからであつて、このときは、第十九願を第十八願の外にみず、その来迎を第十八願力のなかに摂してみておられたのである。

臨終来迎の有無によつて、往生が定まるという考え方ではない。日頃よりの念仏によつて弥陀・諸菩薩の摂護の中に入り、臨終にいたつて臨終来迎の利益を得て、その仏力のはたらきによつて正念に住して往生を得るのである。日頃の念仏↓臨終来迎↓臨終正念を強調されている。来迎仏の他力によつて正念に住せしめられると説くのである。ここに臨終来迎を強調しながら、法然独自の他力の来迎の見方がある。平生より申す念仏は、本願に順じて数にとらわれずに申すところの他力の念仏である。

まとめると、第十九願名において、法然の文獻より「臨終現前の願」（『三部経大意』・『和語灯録』「三部経釈」等）・「来迎引接の願」（『西方指南抄』「法然上人説法事」等）・「来迎の願」（『拾遺語灯録』「示或女房法語」等）といひ、第十九願を「臨終来迎の願」とみていた。つまり、第十八願の念仏者の来迎を誓う願とみたのである。

法然には第十九願に大まかに二つの見方がある。一つは先に示したように、第十九願の多くの見方は、第十八願の誓いによつて浄土に往生する念仏者の来迎の利益を誓うとみるの

である。第十八願の念仏者の臨終来迎を誓う誓願であるという意味での第十九願ということである。もう一つは「第十九の願は、諸行人之人を引入して、念仏之願に帰せしめむと也」と述べるように、「発菩提心、修諸功德」の諸行人をも念仏に帰せしめんがための誓願とみる見方である。これは法然の第十九願観の中では従来の伝統的な解釈とは違い、特殊な例である。

臨終来迎は、念仏者が平生に得る摂取不捨の利益の臨終における顕現態であつて、ことさらに求めなくて自然に与えられる益であるとするのが法然の来迎観であつた。

法然は、主著である『選択集』には「来迎」について書かれていないが、それ以外の文献からは見受けられる。平生より仏・聖衆が念仏の人を摂護し、そのまま臨終に来迎すると説くのである。臨終来迎を否定はしないが、臨終のみを特殊化したり、臨終来迎においてはじめて往生決定を語るのではない。臨終来迎は、臨終に心の乱れを防ぐために説かれている。死や苦をどのように乗り越えるかが大きな問題であり、どのようにして「臨終正念」に住するかが問題であり、浄土往生との関連があるのか重要視されてくる。

真聖全Ⅱ真宗聖教全書

1 『大經』真聖全Ⅰ九〇十頁、『大經』真聖全Ⅰ二四〇二五頁、

『觀經』真聖全Ⅰ六一〇六五頁、『小經』真聖全Ⅰ六九頁。

2 「法然上人説法」〈来迎〉真聖全Ⅳ五〇〇五四頁、『逆修説法』真聖全Ⅳ四二九〇四三二頁、原漢文。

3 真聖全Ⅳ一九三〇一九四頁。

4 『三部經大意』真聖全Ⅳ七八五〇七八六頁、『三部經釈』〈觀經〉真聖全Ⅳ五五四〇五五五頁。

5 真聖全Ⅳ一七八〇一七九頁。

6 真聖全Ⅳ一三三頁。

7 真聖全Ⅳ二一七〇二二八頁。

8 真聖全Ⅳ七三七頁。

〈キーワード〉法然、来迎、臨終、第十九願

（龍谷大学大学院研究生）